

## 17 特殊なニーズのある子どものきょうだいを対象としたワークショップにおける 討論の実施

研究所 障害福祉研究部 北村弥生

沖縄県立看護大学 上田礼子

障害や慢性疾患など健康に特殊なニーズのある子どものきょうだいは、親の注意が特殊なニーズのある子に集中したり、学校や地域で偏見に出会ったり、親亡き後の後見を負担に感じたりすることが知られている。きょうだいに特殊な経験、感情、対処方法を話し合うことにより、孤独感を解消し、得難い経験や感情があることにも気づくためのワークショップは欧米を中心に行われている。本研究では、討論する習慣に乏しい日本において、ワークショップにどのように討論を取り入れることができるかと討論の効果を明らかにすることを目的として討論を試行した。平成14年10月から平成16年12月までに試行した討論なしのワークショップに参加した小学2年生から中学1年生まで約30人に対し、討論ありのワークショップの募集を行ったところ14人が参加した。参加者のきょうだいのは知的障害児あるいは自閉症児であり、知的障害の養護学校または特殊学級に通学していた。ワークショップはアメリカで開発されたシブショップをモデルとし、日曜日の10時から14時半まで国リハにおいて平成17年4月から1か月おきに合計3回実施した。冒険教育のインストラクターが司会進行を行い、ソーシャルワーカーが運営を行った。大人のきょうだい3人程度と医療福祉系の学生3人程度には自由時間の遊び相手を依頼した。毎回、全員で行う非競技性のゲームを6個程度、自分の経験や考えを表現するアクティビティ（討論）を1-2個行った。討論は、自己紹介、障害児のきょうだいからの手紙に答える、マインドマップ、きょうだいについてみんなで話したいことを書き別の人が発表する、20年後の自分ときょうだいの夢を書くであった。モデルでは討論の時間は25分程度であるが、少人数で相談したり書く過程を設けたために、討論に要した時間は平均40分程度になった。参加者は全員の前で一人ずつ発表することは嫌だったが、2-3人で話し合ったり各自で書くことには積極的に取り組み、発表された内容への意見交換は活発で、書いた紙を壁に貼っておくと他人の書き込みを熱心に読んだ。ファシリテーターは、個人の課題でなく共通する課題を扱うことに留意し、参加者が間違った情報を話した時には注意深く訂正した。参加者による評価では討論とゲームはいずれも4-5点（5段階）であり、ほとんどの参加者は障害について親や友人と話し合った経験はなく、きょうだいどうしでの討論があつてよかったと答えた。低学年用のプログラム開発と最初から討論を行う試みを平成17年度後期に試行予定である。